貧乏人ばかり死ぬ？ 熊本県水俣市の奇病

対策に冷淡な保守黨議員

熊本県の最南端水俣市に於て奇病が発生し、次から次へと人が倒れているということはすでに御存知のことと思うが、新聞にも発表されていないためその悲劇はまだ知られていない。

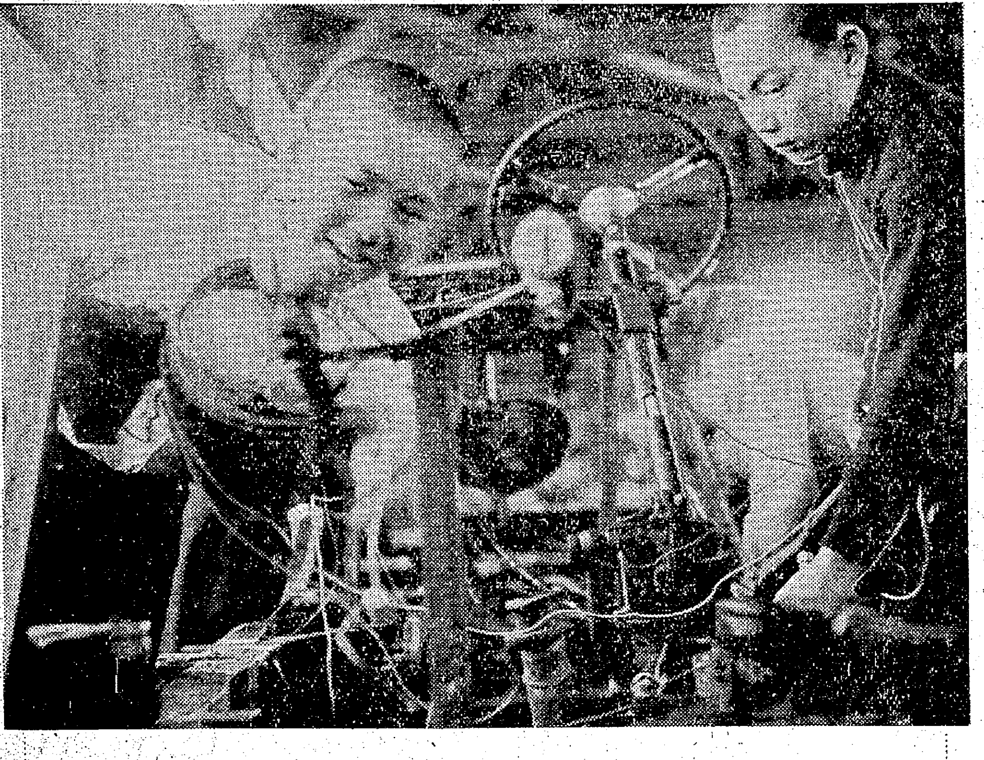
昨年の五月からこの病気にかかつた者が五十四名、そのうち大体治つた者は僅か三名、他は死亡乃至一生「ヨイヨイ」のようなひどい状況で、猫などバタバタと死に、水俣には猫が一匹もいないといわれる位である。

しかも、この病気にかかつた者は生活扶助を受けているか或は、民生保護スレスレの人たちばかりである。何故だろうか？

それは、金持は「貝」とか「きびなご」などはあまり食べないからで、この病気にかかつたほとんどの人は海岸近くに住み、細々と漁をしている零細漁業者で、この人たちは満足な副食を買うことが出来ず、夏でも冬でも貝とか湾内の小魚を取つて食べて来た。いままでは死んでも肺炎だとか心臓マヒで片付けられていたようであるがあまり多いのでよく調べたが原因不明の奇病ということになつた。

さて、ここで考えなければならないのは、貝類を食わなければ生活が出来ない零細漁業、魚が売れなくて参つている魚屋さん、食えば死ぬ、食わなければ生活して行けない人達等々をわれわれはどう判断しなければならないかということである。

原因は「マンガン」だろう、いや「セレニユウム」だ、いや他にある。といろいろ論争もされ、かつ研究を熊大を中心にしてなされているから、いずれ明らかにされると思うが、三月県会で社会党県議団の決議をもつて、県の基本的対策樹立を進めると共に、中央に対しても地元永野県議（社会）を中心として苦しい人たちを救えと立上り、見るべきものがあるが、中央で政府、国会などへの働きかけを行つた地元の人達は、森中参議坂本代議士など革新系の議員の身を捨てた努力に比し、保守系議員の冷淡な態度にフンガイしている新日窒水保労働組合ではこの奇病問題を取り上げ合化労連の大会に提案、総評へも呼びかけ日本の社会問題として世論を動かすと共に保守党に対して猛反省を促す準備をしている。



熊本県職業補導所で技術習得中の生徒

待望の給食会館

不知火町に建設進む

現在の民主的な平和教育を改悪して、昔のような忠君愛国の精神を復活させることは、日本の保守党の一貫した大きな政策であり、福岡県下でもいろんな形で教職員の弾圧が続けられている。市会でも保守の議員は教組を毛虫のようにきらつて、教職員に対する待遇などについては、目の色を変えて反対をするが、その一例をあげると今日まで教育法に基づいて支給されていた教育研修費が、「ボタモチに砂糖を振りかけるようなゼイタクものだ」と云つて、多数をかつて昨年の議会で強引に打ち切つてしまつた。

そこで市長始め革新議員は、教組といろいろ研究の結果、児童の教育の機会均等を計る一環として、発育と健康を増進し、より高い教育の振興を図るために、給食会館並びに教育研究の場を作ることにいろいろと話を進め、保守議員の難グセをたくみにそらしながら、今回やつと建設の実現に至つたものである。総工費は、市が三十一年度二百万円、三十二年度三百万円、計五百万円の二階建で、階下が給食の栄養研究並びに給食婦の学習や実習室になり、将来は給食物資の共同購入、共同献立などに使用し、階上は教育全般の研究をするところに使用される。場所は不知火町の鹿児島本線の踏切りの市所有地で、すでに基礎工事が進められている。

給食制度とその進歩がいかに児童の健康と発育増進に役立つているかは、いろいろな科学的なデーターでそれを示している。

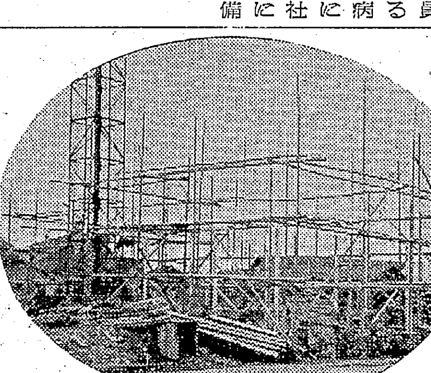


写真 不知火町踏切横に建設中の給食会館

ガンと水虫に特効

市立病院に深部治療機

ガンと云えば死の宣言を受けたと同然に、市民からおそれられていますが、これと不治の病とさえ云われた水虫に最も効力のある最新式のレントゲン線機が市立病院に購入されることになりました。これは、ガンと云うおそるべき死病から、なんとかして市民の生命を護りたいという念願で、今年度の三月予算議会で、五百十五万円という高価な治療機を購入することに決定をしたものです。社会党市長を中心とする革新議員の立場として、市民の衛生と医療の充実というスローガンが、今回の思い切つた機械購入として現れたものです。この治療機は、九州では大牟田に来るのが始めてという精巧なものです。三井本院にも、レントゲン線によるガンの治療機ありますが、これは一間放射線で、一回治療時間は、わずか数分しか出来ません。それはレントゲン線を一定時間以上患部に当てると、原爆の放射能と同じヤケドをするからです、こんど来る新鋭機は、百八十度の多間射線（廻転しながら病巣に光線のシンを合せて照らし病巣の組織を破壊する）仕掛けになつているので、三井病院の治療機よりも五十倍の威力を持つことになっています。現在大阪の日本レントゲン会社で組立てを急いでいますが、今年の八月ごろには市の病院に取付けられることになります。多くの市民の方が、水虫や、ガンのために高い治療代を払つて久大や福岡医大にかかつていられますが、こんどから、地元の病院で大牟田市民はもとより、遠い地方からも多くの患者の方が、大牟田の新鋭機を頼つて来られることになるわけです。耳よりな市民の福音として早くから話題になつています。

こ ぼ れ 話

台風はコンコン

延命公園一帯が博覧会の会場になるが、入口近くにあるお稲荷さんの移動について、神主と市が話しあつた。そのとき市側は御安泰に移すといい、その旨お稲荷さんに謹んで報告し許しを乞うと共に心配される台風の被害がないよう祈つた。そのとき天上から稲荷大明神の声あり。「大牟田には台風はコンコン」

虎の衣を貸りて

博覧会に興行を入れて一儲けしようと企らんだ保守のある市議、代表者会議の席上、中央から顧問として招いた博覧会の権威者である新関氏を目の前にして「こんなどこの馬の骨かわからんものをよんで」とののしつた。

これはオドしておつて、興行を認めさせようとしたボスの戦術だつた。その翌日、舌の根がかわかないうちに新関氏の所にいつて下卑な笑を顔面に浮べ、とにかく頼むと頭を下げていた。それでも断わられ、翌日の正式な会議でまた新関氏をば倒するとい態度に出た今日なお断呼として拒否されているがボス市議とはこんなもの。

一同オー禮！

「頭ア右」、廻れ右、前へ進め、聞いたような言葉です。

五月二十五日の組合総会で大会挨拶のため政治局の面々勢ぞろいしてさておもむろに礼という所へ局長の浦川県議左の方をジーッと見渡し「一同オー、礼！」と号令。いささか気を呑まれた全員、不動の姿勢から四十五度の最敬礼。終つて目をパチパチした政治局一同楽屋でいわく

「浦川さんは革命的なことをやつたね」

「いやあの人は革命の予行演習をやつたんだよ」

結局、浦川さんは革命前線の隊長ということでチョン。

一番しつこい男

土屋知事の御用新聞「縣政日日」はこのところ汚職県政の擁護に忙しい。土屋を神様扱いにしたり、ワイロの親方山本を昭和の佐倉宗五郎に祭りあげるしまつである。このような具合だから土屋県政を攻撃する社会党など親の仇以上に憎い存在らしく、発行の度に悪口を書かれないことはない。この縣政日日が先日番付を発表した。県議中一番発言のしつこいのが浦川、二番目が小宮、三番目が高口という具合。これを見たしつこい男三人の話「縣政日日からほめられたら社会党から除名されるところだつたが、これで特調委員の資格を云々されず済んだな」と大笑い。

昭和の木口小平

熊本県議の松岡さんといえば泣子も黙る?といわれたヒゲ武者だが、どうしたものかこの松岡さんニュースカーを見るとコソコソと人の後へ行つてしまう。

日頃演説好きであるのにニュースカーとなると遠慮する。不思議だねということになり東洋社争議のとき〃はたかぜ〃に皆で頼んでやつてもらつた。

本人やるにはやつたが物すごく緊張して気の毒な位だつたが降りてもマイクを口からはなさない。どうも変だから事情を聞くと、それは昨年の夏、参院選挙のとき三池へ応援に来て得意の一席をあの車で〃はたかぜ〃に乗るには乗つたが日陰はなし照りつける車上演説で軽い日射病にかかり、フラフラになつて座りこんでしまつた。

それ以来ニュースカーノイローゼしかし、彼はマイクを口からはなすことは革新議員の恥だとばかりしつかり握りしめるので手が硬直し、演説が終つても仲々マイクがはなれなかつたのである。

九コース五十米

延命プール完成

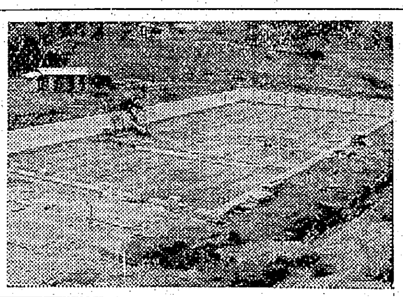
大牟田市延命公園内に九コース五十メーターの公認プールが、来る七月一日完工、開所式を行う。

このプールは昨年三月から主として失対事業で行つて来たもので工事過程で岩盤が出たためにダイナマイトをかけるなどしたので遅れて今日に到つた。

公認プールと打出しているから約三千人収容の観客席は、今夏だけ芝生の上でがまんしてもらうということになつている。

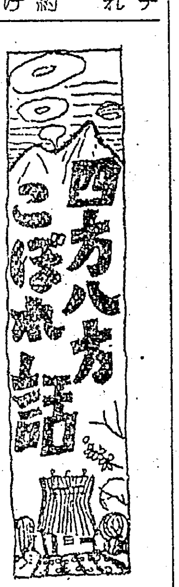
プール使用は有料で、三時間づつで総入替えとなり、入場料は大人三十円、中人二十円、小人十円となる予定。プールを団体で独占使用するときは、日曜・祭日、その他の日で料金が異つてくる。日曜や祭日に午前中使用したときは四千円が定額である。

入場料はこの他に団体割引きがあり、五十人以上二割、一〇〇人以上三割の割引となつている。



売れだした国産車

一時車といえば外車ばかりであつたが、国産車奨励の意味で政府が国産車を買い出したので、地方自治体もこれにならいはじめた。



村と町 むかしむかし

馬ドロボウ

九世紀の末ごろに、武蔵、上野などの豪族の中には、浮浪者や手下の農民を使つて、新手のドロボウ団をつくつた。群をなして、牧場や駅を襲い、手向う者は遠慮会釈なく殺して馬を盗んでいつた。

奪つた馬をひきつれ、自分たちも馬にまたがつて意気揚々と本拠の村に帰る馬ドロボウ一行の顔は食物をさがして目をきよろつかせていた浮浪の時代とは、全く別人のようだつた。

彼らは東山道で馬を奪うと、その背中にくくりつけてあつた荷物を家にしまいこみ、平気な顔でその馬を使つて、東海道で奪つた馬は東山道に運んで役人の目をごまかした。

役人もこれを見のがしていたわけではないが、なにぶんにも馬を使いこなす連中のことだから雲をカスミと逃げ去つて隣りの国に入つてしまう。

当時の役人は、隣りの国まで追つてゆけない。だから組織的な馬ドロボウは信濃、駿河などの方まで遠征した。国司たちも、これには全く手を焼いた。とうとう碓氷峠と足柄峠に関所をつくつて、通行証のない者は通さないことにした。

境界

山城国、浅川藩領と三好藩領との境界の棒グイをまん中に、転び伏した女の死骸があり、頭は浅川足は三好の領分へ向いていた。

さて両方へ訴えが出ると、まず直接関係の村の庄屋らがかけつけて、棒ではかりながら、

「もう一、二尺どつちかへ寄つていればよいのに、どつちつかずの女だわい、さぞかしあの世でも浮かばれまい」

と頭をひねる折しも、両藩の検使お着き、土にひれ伏しかたずをのでん待つ中を、浅川藩の冷泉氏と三好藩の松永氏とが、

「のう冷泉殿、ところの者を呼びだして、シサイお尋ねなさらぬか貴殿おききなさるなら、拙者もともにうけたまわる」

「ごあいさつにおよばず、いざいざ、しからばごめん」

松永氏の発言にもとずいて小役人はただちに、

「浅川殿、三好殿、両方御領の庄屋出ませい」

「ハハツ」

「さて、はじめて見つけたのは何者ぞ、して、その節ほかに怪しいことはなかつたか、残らず申せ。死骸検分のうえ、相違あらば汝らキット曲つたことをかくしていることになろう」

小役人の言葉に庄屋まかり出て

「見つけし人は三好さま御領の百姓、すなわちこれなる木六兵衛。……その見たとおりまつすぐ申し上げい」と木六兵衛を突き出す

「ハイハイ、この木六兵衛、今朝早う出かけて、ふつと見つけ、まだ暗いし小気味はわるし、よく見届けもせず、そのまま逃げて帰つた足で庄屋殿へ注進し、それから村じゆうかけまわり、浅川さまの御領へも人を走らせ、庄屋出合いのうえ、死骸にコモをきせたばかり、ほかには何事も存じませぬ」

この陣述を両家の若党が、矢たて取り出して一々書きとめる。

ここらで冷泉氏と松永氏顔見合わせて、

「さて」

「いざ検分」

と両人死骸に立ちかえり、ハネのけるコモの下から、現われたのは町人、百姓でもない女の死骸であつた……

近世農村の成立過程の一場面である。